

「北方」概念と事例性に関する覚え書き：聞き書き，手記，事例調査の史的断片と現在

著者	加藤 春樹
雑誌名	北方圏生活福祉研究所年報
号	2
ページ	47-53
発行年	1996
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001748/

「北方」概念と事例性に関する覚え書き

－聞き書き、手記、事例調査の史的断片と現在－

加 藤 春 樹 北海道女子大学

抄 録

「北方」概念をタームとして使用したわが国ヒューマン・サービス実践・研究、事例性抽出によって保健・福祉施策の転換をもたらした特異的事例について、事例性への洞察を軸に歴史的にレビューした。

「北方」を自ら称した戦前「北方教育運動」、北海道を調査フィールドとした箆山京の貧困研究において、「北方」は手記（綴方）、聞き書き（インタビュー）によって得られたティピカルな事例性そのもの、ないしそれと表裏をなしていた。また森永砒素ミルク中毒事件被害者の事例調査、薬害エイズ被害者の親族による手記は、ティピカルに問題提起的、且つ保健・福祉施策転換の契機であった。

「北方」はとりあえずは本来の史的タームに留まるとするのが順当であるが、今日的事例性の追求はより重視されるべきであり、事例研究による仮説の豊富化と社会文化事象をバックグラウンドとしたニーズ比較研究などによって、「北方」概念に新たな意味合い（有意性）を付与し得ると考えられた。

キーワード：「北方」、聞き書き、手記、事例、事例性

緒言——「北方」のイメージ

「北方」という言葉で喚起されるイメージは、先ずは低温、積雪、日照時間の相対的な短さなどの自然条件——集約的には寒冷による規定性であり、北方圏福祉というときにはこれに規定された福祉の有り様（背景、ニーズ、施策、サービス）を想定するのが常識的というものであろう。それならばと死因別SMR（Standard mortality ratio＝標準化死亡率）から凍死を抽出し、その北方的特質を検討し福祉の予防策（サービス）を構想するなどというのも、北方圏福祉研究の脈絡に位置づくと思うかもしれない。しかし現実はその安直ではない。それは地理的アナロジーに他ならない。国際社会の「北方」は日本の「北方」には敷衍できない。その緯度やエリアの凝集性・等質性もちろん異なるが、それだけではない。

今日の凍死（登山事故を除く）は、寒冷か温暖かという自然規定性による地域相とパラフレズしない。むしろ都市の社会的漂流と滞留に関連し、社会文化的死亡動態と言って良い。北国—寒い—凍死が多いという直接の類型想定はもはや成り立たず、一次要因と二次要因は逆転する。古記『北越雪譜』（鈴木牧之：1837, 1936, 1978）も、自然条件と社会文化特性の関りを中心に記述しているが、冬の豪雪・湿雪は東北から兵庫県の日本海側まで

極めて一般的で、積雪もまた「北方」の語義を強化しない。結局自然条件からの類推で取り立てて「北方」性を問わなくとも、個々の「地方性」で十分一般化可能である。

さて「北方」概念を一般的地方性に解消せず独立した社会文化的概念として設定することは、研究部面で生産的だろうか。類ヒューマン・サービスと言い得る教育の領域で、社会文化相としての「北方」に敢えて言及し、それを実践のメルクマールとして押し出した思潮があった。本稿ではこの思潮を立論の糸口に、保健・福祉の実践・研究における事例性への接近を試みたい。「北方」概念が幾許かの生産性を持つと仮定するならば、それをどう今日的研究の有り様に敷衍し得るかが問われねばならないと思うからである。

1. 生活綴方運動における「北方」性

1930（昭和5）年2月、雑誌『北方教育』の創刊前後から戦前期生活綴方運動は後期に入る。この時点では凶作と飢餓にあえぐ東北農村が「北方」の謂いであったが、1935（昭和5）年の最盛期に至り運動は北海道へ波及し『教育・北日本』、『北見文選』、『綴方林』の相次ぐ創刊、『綴方生活』の北方性特集の刊行、「北海道綴方教育連盟」の結成を見る。しかし運動の展開を直截に「赤化」と見る時の権力の弾圧も激化し、1938（昭和13）年頃からは

生活綴方を領導した諸雑誌が終刊・廃刊を余儀なくされ、1940（昭和15）年には東北・北海道の綴方教師の一斉検挙により運動は事実上終息、教師たちは残された拠り所として留岡、城戸らの拠った雑誌『教育』による教育科学研究会（留岡：1964）に移行していった。これは教育運動全体の中でも「綴方」という教科限定性を持つ運動である。しかし「北方」への意味付けを試みた営為として無視できないと思われる。

当時この運動の理論的指導にあたった村山は「北方的生産生活のタイプは南方的なそれに比較していちじるしく封建的農耕として発達し……あらゆる生活において封鎖的生活性の中に伝統性を保存し」と指摘し、「今回の東北地方の凶作飢饉のもっとも悲惨な姿を展開した地域は、特に商品生産の未発達地域に多い。これは更生運動などの指導においても重大な関係を持つものである」と東北の文化的立ち遅れ要因に論究する（村山：1935, 1967）。さらにこれを踏まえて「言語そのものが現実の具体的存在から遠ざかっている現実疎外性をもつと同様に、標準語は地方語に比較していっそう現実から疎外され、生活言語としての豊かさを失っていると思う。……読み方教育における国語実力の貧困としての語彙の貧困と、正常なる生活的認識に於いて言語教育の組織的体系は、北方生活教育運動における重要な問題として、考究を進められねばならないものである」と以下の「工作」課題を提示する。「一 生活台の真実から出発した言語的真的問題。二 観念的言語を生活言語にまで——生活と言語の密着の問題。三 日常生活語に生活的知性と意欲性とはらませる言語活動と生活行動の密着。四 北方言語の現実を（ママ）正しい国語としての位置づけのための工作……」（村山：1936, 1967）

これを地方性を押し出すスローガンとしての「北方」であり、地方性における特異的「北方」をティピカルに提示する何も無いとする批判（入江：1980）もあるが、それは北海道・東北という水稻栽培はもとより予め農業生産が限定された寒冷地の凶荒の激甚さ、さらには明治期以後東北・北海道が置かれた産業と生活の政策的限界設定（歪曲）による構造的特質を顧慮していない。さらに村山は「およそ民族もしくは民衆の性格を決定するものは自然的環境および社会的環境である」と、当時としてはかなりイデオロギッシュなニュアンスをたたえた「民族」という記述で今日の「民俗（＝社会文化特性）」に敷衍する様なアクロバットに近いことさえ試みて「北方」性を際立たせる（これをアイヌ系住民など、わが国の多民族性を考慮したと見ることはできない。村山には文化人類学的事例性は視野の外だった）。それにしても入江のように「北方」性それ自体の端的な概念規定が無いことをもって、そのティピカルな現実そのものも仮想

であったと看做するのは不当であろう。小川は当時を回顧して「国民生活における最底辺を『生活台』として、そこから教育を構想していこう」とした（小川：1966, 1980）と村山の用語を引いて教師等の志向を解説し、「東北の植民地的な生活の貧しさの中から、東北の教師たちが、生活綴方運動という形でそれをはじめ、そして、生活綴方は最底辺の生活に立つがゆえに日本全体の解放の教育となることができると考えた」教師たちを評価する。

その作品的質においては議論が分かれるが、子どもたちの手から子どもたち自身の目で見た生活事実が数多く記述されたことは紛れも無い事実であり、①自由に、②生活の真実（主体的真実）を、③具体で（概念碎き）書く、という特質を持つ生活綴方運動は、「北方」の謂いによって「最底辺」のティピカルな状況を事例性として提示することになった。それは北方か南方か、あるいは都市か農村かという「あれかこれか」の模索ではなく、時代の相としての貧困に焦点を置いた生活的事例性の追求であったと言えよう。

2. 簗山京の貧困研究と北海道

簗山は戦後労働科学、社会医学研究、公的扶助とそれに関する貧困研究などの方法論の発展に数多の寄与があり、その調査研究フィールドに北海道の漁村・僻地を多く設定している。北海道において最初に手掛けたのは、いか釣り船における児童労働の問題であった。

1946（昭和21）年、いか釣り船に乗務していた少年が深夜の海に落ちて死亡したことは米進駐軍を驚愕させ、進駐軍民事部はこれを児童福祉問題として労働基準法を適用し禁止した。しかし沿岸の漁家はこれに従わず、少年のいか漁従事は恒常的なものとして続いたのである。簗山はこれに児童福祉問題ではなく労働問題として照明を当てた。その手法は基本的には統計調査であり、中学生の出漁が恒常的・職業的なものであること、男子で出漁しないものは小学校5年以上になると例外的であることを示した。しかし少年の稼働が漁家経済にとって何故必然なのかを解明することは、調査を一步進め、いか釣り船労働の実態（事例性）を詳細に聞き取ることで初めて可能であった。

いか漁に従事する少年の乗る船は動力船が圧倒的に多く、且つそれは「他人の家の船」である。船上は釣りに従事する員数分に桟目に区画され、桟目の中で各々に釣った水揚げの10分の7を船主に渡すという完全出来高歩合制になっていた。自前の船を持たない漁家では自分の子どもを一人でも多く他家の船に乗せることが稼ぎにつながる分けである。

このいか漁のほかにはほっけ延縄（350本程の針がついている）の餌付け、たら漁期のたらの陸上処理（内蔵・

胎子の選別、干鰯製造)が児童の労働を根幹としており、且つ、いかは6月～10月、ほっけが5月～12月、たらが12～3月の季節労働であった。

このことから箆山は「この児童労働は、漁村のいか・ほっけ・助宗鰯を現在のようにして漁家が別々に釣っているという漁業経営が廃されない限りなくならない。……児童労働がなくなれば、漁業経営がつぶれてしまうのである。……熊石村(現:熊石町)の児童労働は、決して貧困からくるものでもなく、……沿岸漁業そのものが大人の労働とともに児童労働の上に成立している……」(箆山:1954, 1984)と産業構造そのものの問題状況に踏み込んで分析し、単に児童労働を禁止するのみでは問題解決に至らないと結論した。

また学校教育と児童労働との関係について「教育と児童労働とは背反し敵対関係に立っている。学校の側からみれば、児童労働は禁止すべきであって、児童を就労せしめないことが、教育の第一義なのである。逆に親たちからみれば、義務教育制度によって、児童労働力を学校に奪われ、またこれが、労働基準法や児童福祉法と結びついて、禁止にまで発展することは生活の問題なのである」(箆山:1955, 1984)と捉え、学業成績の不振を児童労働の帰結と機械的に断ぜず、漁村内の階層分析/貧困のより深い研究の必要を示唆した。紋切り型の福祉問題という平板な切り口を避け、敢えて労働問題という切り口から事例性を遡及した研究方法は、より深化した形で福祉問題=生活問題に研究の論点を与えた。

これら先行作業を経て箆山は和寒・熊石・森の3町村(当時)の調査で、生活保護被保護世帯における教育費の支出構造を検討した。まず教育費支出を被保護世帯と他の層とで比較し、被保護世帯の教育費が児童の学年進捗と相関しないことを指摘する。他の階層では学年進捗とともに教育費支出は増加するのだが、被保護世帯は教育費を予め圧縮しぎりぎりの水準まで落としているために学年進捗とともに変化しないのである。従って当然のことながら被保護世帯と他の層とでは、学年進捗とともに教育費の較差が開く。そしてそれが「偶然にも」体位の差、学業成績の差の各々によく一致していることを見出す。更に支出される項目をより細部にわたって検討する。教科書・ノート・鉛筆・画用紙など、学校から支給されているものの支出に階層差はほとんど無い。それがコンパス・定規・そろばん・裁縫用具など一般の商店で購入するものになると差が生じ、遠足・運動会・修学旅行などの行事費、映画・見学、小遣いに至っては支出に著しい較差(被保護世帯は概ねゼロ)がある。且つ被保護世帯の教育費支出は教育扶助の実額よりも少ないのである。「なぜ教育扶助金額だけでも全部を教育のために使わないのだろうか。一家中が空腹だからだ。その子

ども自身が腹一杯食べていないからだ。教育扶助費で菓子を買ってしまうのである」(箆山:1970, 1984)。これが体位との相関の裏面である。このような事態に、現場の教師からは教育扶助の増額にあわせて現物給付への切り替えを求める意見が出た。これにも箆山は事例を対置する。

「北海道の漁村で、冬期の薪炭費が加算されるようになった時に、同じような意見が出て、福祉事務所は石炭1トンを町の石炭屋に発注して、被保護世帯に現物で支給した。この世帯は石炭ストーブを持っていなかった。海岸の流木を拾って来て炉で燃していたので、支給された石炭を燃やすことができなかった。そこで石炭屋に4000円で売って、現金にかえたのであった。石炭屋は石炭をそのまま持ち帰って、福祉事務所から1トン6000円の代金の支払いを受け……1000円をもうけ(卸値5,000円)、……(4000円で買い取って持ち帰った石炭を)改めて別の人に6000円で売ったので合計3000円をもうけた。被保護世帯は6000円の石炭の代わりに4000円の石炭代をもらって、相変わらず流木を炊いて、家中を煤だらけにしていた。……教育扶助の場合にも、同じことが起きることになってくる」(箆山:1970, 1984)。これが事例性である。それは具体に着きティピカルで鮮烈である。統計的に表示されない局面をティピカルな事例で提示し論旨を補強する——それは新たな仮説提示でもある——という箆山の手法は、記述的生活史(時系列的事例性)から貧困要因を検討する方法(箆山:1985)を経て、農家の分化・分解による貧困創出を、詳細な聞き取りを基礎にした133世帯の生活史による事例の類型集積性によって解明するという和寒町調査(箆山:1976)に結実した。これは単に貧困研究の脈絡にのみ位置するものではない。トータルな地域研究としても、統計研究に埋没しない形で事例研究の手法をオーソライズしたものとしても先駆的であった。さらに特筆すべきは、貧困創出に関わる生産阻害と健康に対するリスク・ファクターへの自然要因・社会要因の重層的な関与を明らかにする上で、フィールド設定の意義が大きいことである。それを村山の提示した歴史的「北方」の延長上にあるということとは、さして不当ではなからう。

3. 実践と事例研究

「北方」教育運動と戦後社会調査で北海道をフィールドにした箆山の仕事を見て来たが、綴方(手記)や聞き書き(インタビュー)による事例の意義を今更ながら再認する想いである。

もとよりわが国における聞き取り調査は『日本の下層社会』(横山源之助:1899, 1949)以来数多く、それぞれに時代の相を典型的に抽出して来ている。戦後の岩手県を古着屋として歩きながら、戦没農民兵士の掘り起こ

しや「農家の嫁」の実態を聞き取り（大牟羅良：1958），やがて『岩手の保健』編集長として岩手県全域の乳児死亡改善，僻地医療の展開に足跡を残した大牟羅良などはさしずめこの直系の後裔と言えようし，戦後保健婦活動の盛期である1950年代に，北海道の開拓保健婦の手記など専ら事例性を基礎とした実践記録が数多く書かれたのはよく知られた事実である。

しかし1960年代以降保健福祉領域の学会・研究会では，こうした実践報告や事例性を基礎にした調査報告は減少し，勢い実践記録の刊行も稀になり，統計的検討による仮説実証的研究や施策システム研究が主流を占めるようになった。今日事例性という概念に照らして確度の高い研究が学会に報告されるのは，領域別医学会における症例研究がやっと市民権を得ている程度ではないかと思えるほどである。

一定のサンプル・サイズを確保した上での統計研究の重要性は論を待たない。しかし社会学・文化人類学など福祉・保健の上位科学，隣接諸科学においては，事例研究の産み出す豊穡な果実＝仮説提起が新たな研究を主導している。にもかかわらず，福祉・保健領域で事例研究がこれほど顧みられないのは，サンプル・サイズを担保し得ない現場実践者が「統計研究でなければ科学でない」という誤解と思い込みに囚われ，さらに事実の綿密な裏付けある言語化（ストーリー・テリング）の訓練が行われていないことによるのかもしれない。事例研究とその方法論開発は科学性が乏しい，非科学であるという先入観は払拭されねばならない。個々の現場から「関り」における事例性が大胆に報告されねば，福祉・保健研究の活性化は図れない。研究的視点無き現場は頹廃する。考えることへの保障の無いところに福祉はない。

事例研究＝仮説提起の研究は誤りを犯すリスクが高いという。独立の事例はone of themではあるが，それ自体の真実性を担保する。「でも，それだけだ」ということでもある。しかし仮説とは本来そういうものであり，統計的立証の蓋然性もまた誤りを含んでいる。誤解を怖れずに言えば，「科学すること」とは尤もらしい解釈を現実の事象とその表現形から捜し出すことに尽きるのである。統計研究も事例研究も等しく，言語の不確かさ，ストーリー・テリングがフィクションに化けることへの誘惑，マジックへの頹落を能く避け得ること，に依存する。

4. 砒素ミルクから薬害エイズへ

1) 『14年目の訪問』

ここで時代を動かした事例を見てみたい。それは『14年目の訪問』の名で知られる調査である。1955年6月頃から近畿圏以西で乳幼児の「奇病」が報告され始め，

8月山陽新聞は「人工栄養児に奇病！——原子病に似た症状」と報道した（この「奇病」という表現は後に熊本水俣病や富山イタイイタイ病でも繰り返される）。直後岡山県衛生部は岡山大学医学部法医学教室の分析結果に基づき，森永ドライミルク（MF）から大量の砒素が検出されたことを発表した。わが国食品公害で未曾有の被害を出した「森永砒素ミルク中毒事件」の始まりである。被害者の親達は迅速に行動を起こし9月には「森永ミルク被災者同盟全国協議会（全協）」を結成するが，加害企業森永と厚生省の強行姿勢，それに追従した世論誘導に等しい新聞報道の中で運動は疲弊し，翌1956年4月，死者に対し25万円，生存患者に一律1万円，入院患者加算限度2,000円という僅かな補償金などで妥結する。あろうことかこの補償の交換条件として全協は解散させられ，将に「刀折れ，矢尽きて」運動は終息する。

1969年10月，第27回日本公衆衛生学会において丸山博らは『14年前の森永MF砒素ミルク中毒患者はその後どうなっているか』という演題を発表し，この事件が終っていないこと，被害者と家族が未だ重い後遺障害に悩み続けていることを世に出した。「昭和43年の秋に大阪府下の養護学校の一養護教諭が，重度の脳性麻痺に侵されている一生徒が昭和30年当時に森永砒素ミルク中毒に罹患していることに気付いて，『ひょっとしたら他にも』」と思って被害者を訪ね始めたのが発端」（財団法人ひかり協会：1985）となり，丸山の指導のもとで保健婦，養護教諭，医学生らの無償・自主の行為で担われたこの訪問調査，『14年目の訪問』（森永ミルク中毒事後調査の会：1988）には，事件当時の被害者名簿をもとに得られた68事例が記載されている。

事例はdemographicな記述を性，生年月日，調査時点での就学状況のみに限ってプライバシーを完全にマスキングしており，思春期に達した被害児と家族が当時置かれていた状況——被差別と隠蔽——を髣髴させる。聞き取り調査項目は記述式のopen-questionnaireで，「① 当時の状況」として生下時体重，発育と栄養補給の状況，発症（被害）時の状態像，飲用ミルクの缶のタイプと数，会社（森永）の対応，「② 現在に至るまでの状況」として病歴，養育上の問題や学業の状況を含む生活史，現在の状態，「③ 家族の感想」「④ 訪問者の感想」の4項目に押さえられており，調査者の資質により情報量に著しい差が出やすいスタイルである。しかしながら有為のヴォランティアである調査者が大部分夜間に訪問して行ったこの調査では，被害者の生活史と現況に関する情報量は全事例に亘って遜色無い。

例えば事例No.54（抜粋，以下同じ）

……始めから森永ドライミルクを使っていた。経済的理由により、お金のある時に……4～5缶ずつ大缶を買った。生後4ヵ月頃より、緑便を出し下痢……近くの小児科医で受診したところ「単純性消化不良症」と言われ、投薬を受けていた。……薬を飲んでも下痢は治らず……（生後10ヵ月）37～40℃の熱が長く続くようになり、皮膚の色がうす黒くなり汚れた感じがした。……保健所では「長い間入浴させていないから汚いのだろう」と言われた。生後8ヵ月頃おすわりをしていたが、這い這いはできなかった。……ラジオでひ素中毒のことをきいた……ミルク缶番号……一致した。（先の）小児科医に「ひ素中毒ではないか」と相談をしたところ、「違う、腸炎だ」と言われ……（他医で砒素中毒と確定）。……森永のしたこと、見舞としてマンナ2缶と5,000円。あとで2,000円。5,000円。……昭和30年9月末頃……「ひ素はなくなっているが後遺症で脳性マヒである」、「これは脳性マヒや、しかたない、味の素でもなめさせておけ」。……薬代は当時で月1,000円。往復ハイヤー300円で、経済的にも非常に負担になり苦しかった。通園には本児の弟（生後1年）を母親が背負い、本児を父親が背負って……。

重度CP（cerebral palsy：脳性マヒ）、ADL（activity for the dairy living：日常生活動作）全く不能の事例、所謂ねたきりの重症児である。児の状態の変化、家庭の経済状況、医師・保健所の対応、さらに家計の圧迫と両親のケア負担、記述的事例性の重さを知らしめる。

今一つ、事例No.59

……ミルク缶のロット番号が全部該当した。……顔や首が黒くなり……肝臓が3横指腫れていた。治療に5,000円かかり、森永会社に、これをもらいに行くと、いやな顔をされて辛かった。……現在……健康状態良好……学校は休むことなく、兄弟の中では一番体格がよい。勉強も好きである。……後遺症も残らず心配はいらないが……

訪問時このような事例は軽症ないし治癒例と考えられた。14年目、即ち被害者らは思春期にあり、後遺症の危険からは脱したと家族は期待したのである。しかし後に被害者らが10代後半から成人を迎える頃、この人々から、精神分裂病、BPD（Borderline Personality Disorder：境界人格障害）などの多様な精神障害が発生したのだった。

丸山報告と『14年目の訪問』は世論を動かし日本公衆衛生学会、日本小児科学会などの学会をも動かした。被害者と親達は再度「森永ミルク中毒のこどもを守る会」を始めとする組織を作り、加害企業森永と国・厚生省の責任追求に立ち、加害企業の労働組合（全森永労働組合）も全面協力し続けた。そして5年後の1974年4月、被害者・家族の恒久救済機関、（財）ひかり協会を設立させるに至る。多くの公害訴訟が補償金の支払いに矮小化される中で、被害者の将来にわたる生活保障・支援、健康（医療）保障を事業とする組織を創出したことは、後のスモン訴訟、今日の薬害エイズ被害の保障運動に優れた教訓を残した。もし協会が設立されていなかったら、先述した20代前後以降の発病者らに対する被害保障とケアは、一層困難を極めた筈である。そしてこの事例調査がもし行われていなかったならば、被害者はクリオの車輪の下に倒れ、埋もれることになったかもしれない。

2) 薬害エイズ

本（1997）年2月、一人の母親の日記が刊行された。

「10月8日（土）……ついに私もということになり、原稿なしでやる。『私の息子は一八歳です。血友病の治療に使った血液製剤で感染させられました』と自分の子が被害者だということを外で初めて訴える。ほとんどの人は忙しく立ち去っていくが、それでも立ち止まって聞いてくれる人がいて、励まされる」（川田：1997）。

HIVに汚染された血液製剤が多くのAIDS罹患者を生み、とりわけ血友病患者に被害者が集中したことは今日周知のこととなった。それが製薬企業・厚生省の犯罪と言い得る事柄だったのは、これまで判明した事実で明らかといって良からう。しかし汚染された血液製剤が商品として流通し投与されるに至った詳細なメカニズムは未解明で、一層の情報公開が望まれるし、刑事事件として立件された公判の今後に期待したいと思う。

そして今一つ急務なのは、薬害被害者を中心とするHIV感染者に対する医療・保健・福祉の支援の方法開発と普及、システム形成である。そのためには質的事象を含む被害の総量の把握が不可欠である。HIV感染とその帰結であるAIDSの発症は、障害発生からキユーア、ケア、転帰に至るまで、今日の障害現実を代表する。発生において人為的であり、砒素ミルク被害、薬害スモンの教訓が全く生かされず、避け得たはずのことが繰り返された。キユーアにおいては今日の医学的治療の限界が露わであり、治療法・治療薬の開発を待たねばならぬ。ケアの前提としての障害像は、免疫能の低下

による日和見感染と臓器の機能低下、身体諸力全般の低下からやがてADL困難をきたす。さらに脳症の発症は視覚、聴覚、発語、認知、知的理解などを障害し、精神症状の発生を多くの患者にみる。加えて謂われない社会的偏見と差別、不当な被害の現実と理不尽で早すぎる死がある。この不条理に対する心理的ケアが絶対に欠かせない。これらの苦しみは被害者のみのものでない。家族もまた共にする。トータル・ケアが約束され実現されねばならぬ。

しかしこれらのケア・システムを構想するには、ニーズを評定するデータが圧倒的に不足している。それはHIV/AIDSの匿名性によるものである。この状況は、わが国の社会文化特性に負っているのみでない。政府による不用意な法制定と、エイズ防止キャンペーンは被害者の被差別状況を深化させた。すなわちニーズ・アセスメントに不可欠な事例調査は不可能といって良い。

HIV/AIDS感染者就中被害者に関わろうとする保健・福祉従事者は、著者に多くを負うことになる。被害者であること、感染者であることの現実と心情、それが生活をいかに変えるか、社会的な関わりの方々の相をいかに狭め歪めるか（実相）、生活現実の困難はどこにあり、その支援はどの様なものでなければならぬか、この手記はそれらを語って余すところがない。日記であることがその情報量を膨大なものにした。我々は代表性を持つ事例、即ち事例性としてこの日記から「何に対してどの様に当たる」ことが求められるのかを学ぶ。

結語——記述世界の豊饒

聞き書き・手記は、「言語そのものの持つ疎外」を今日の時点で超えようという試みの不毛ではないことを教える。事例研究の減少や提示された事例の情報量が貧困であることは、保健・福祉領域の実践・研究に従事する者の問題であって、情報の事実性・真実性を担保した優れた聞き書き・手記は生まれ続けているし、世に必要とされ復刊さえされている（中野：1977）（李：1997）（河上：1967, 1997）。またストーリー・テリングを定着させる（書く）優れた方法論も提供されている（加藤：1996）。それらは固有の生活現実を正確に書くという作業が普遍を内在し、独立の事例性を持ち得ることを示している。

今日、フィクションを別にすると、聞き書き・手記のほとんどが企業外の生活者、あるいは企業を退いた者の手に成り、多様な生活の色合いを描き出している。しかしこのことは不思議ではない。そこには語るべき生活が復権している。「生活者」とは企業中心社会か

ら脱落した弱者の謂いである。安住を許さぬ企業社会で多くのノンエリートを従えて企業人として行き得ることは強者にほかならず、それは生活事実を直截に語ることを困難にしている。北海道の産業基盤はその意味でも、生活者と呼ばれることを余儀なくされた人々を生み出し続けてきた。この人々が福祉の主体となるか客体となるかは今後にゆだねられているけれども、事例研究の復権はそうであるからこそ猶のこと必要である。数多くの事例研究が行われることによって得られる今日の事例性（仮説）の豊富化は、フィクションに傾斜する悪しきストーリー・テリングを淘汰し、社会文化事象をバックグラウンドとしたニーズ比較研究などの研究枠組みの展開と方法論開発に連なる。それが地理的アナロジー、あるいは史的タームとしての「北方」に新たな意味合い（有意性）を付与し、社会文化的タームとしての復権を準備することになるだろう。

謝 辞

この拙文を謹んで昨年長逝された恩師丸山博先生に捧げる。先生は本稿で取り上げた砒素ミルク被害発掘の仕事を指導された方であり、戦後初期、厚生省大臣官房統計情報部にあって母子衛生統計の基本枠を定められた方であった。「統計研究をするなら数字から子どもが立ち上がってくるような統計を書け」といつもおっしゃられ、その概念枠組や統計的蓋然性に対する警戒心を能く維持するよう後進を戒められた。先生の事績は α -indexの開発を始めとする衛生統計研究、小島勝治の事績発掘、食の研究、鵠外研究、ニーチェ、ニーダム、アーユル・ヴェーダにおよび、interdisciplinaryを真に体現された教育者であった。学恩計り知れない。

筆者所蔵の先生の全文献は先年先生の著作集（全3巻）を岡部昭彦先生と共に編んだ折、（助産山漁村文化協会に寄託したままである。そのため本稿では統計性と事例性に関する先生の数多い示唆に触れ得なかった。いずれ稿を改めて論じたい。

reference

- 入江道雄：児童生活詩形成史，あゆみ出版，1980, 53-80
- 籠山京：児童労働（『児童問題講座』4，新評論社，1954）
- 籠山京著作集6，1984, 11-32
- 籠山京：漁村における児童労働と学校教育の関係に関する一研究（『教育社会学研究』7，日本教育社会学会，1955）
- ibid. 33-55
- 籠山京：貧困児の教育（『低所得と被保護層』，ミネルヴァ書房，1970）
- ibid. 84-118
- 籠山京：戦後日本における貧困層の創出過程，東京大学出版会，1976, 472

籠山京：沿岸漁家の分化分解と貧困層——北海道熊石村調査，籠山京著作集7，1985，75-178
 加藤典洋：言語表現法講義，岩波書店，1996，257
 河上秀：新版留守日記，（『留守日記』，筑摩書房，1967）岩波書店，1997，425
 川田悦子：龍平とともに——薬害エイズとたたかう日々，岩波書店，1997，325
 森永ミルク中毒事後調査の会（edit.）：復刻版14年目の訪問——森永ひ素ミルク中毒追跡調査の記録，1988，246
 村山俊太郎：北方文化の覚え書（綴方生活，1935.5），村山俊太郎著作集，2，百合出版，1967，28-32
 村山俊太郎：読み方教育の北方的実践（厚生閣，1936），

ibid. 33-47
 中野卓（edit.）：口述の生活史，御茶の水書房，1977，289
 小川太郎：生活綴り方と教育（明治図書，1966），小川太郎教育学著作集，3，青木書店，1980，371-382
 大牟羅良：ものいわぬ農民，岩波書店，1958，208
 李青若：在日韓国人三世の胸のうち，草思社，1997，221
 鈴木牧之編撰，岡田武松校訂：『北越雪譜』，岩波書店，1837，1936，1978
 留岡清男：教育農場五十年，岩波書店，1964，85-89
 横山源之助：日本の下層社会（教文館，1899），岩波書店，1949，348
 財団法人ひかり協会：ひかり協会10年の歩み——恒久救済の道を求めて，1985，348.

A review of the concept of “HOPPOU (northern regions)” and the “CASE”.

—the essay on the interview record, the journal and the case study.

Haruki Katou (HOKKAIDO Women's University)

Abstract

“HOPPOU” was employed as a key term to explain the concept on the native of the practice and the study of the human service in our country. This paper reviews the CASEs that have brought the policy change in the field of health and welfare, with a special interest in extracting the essence of the CASEs.

The term “HOPPOU” was employed by some scholars and many activists in such works as “HOPPOU Education Movement” and the field research on poverty in Hokkaido by Takashi Kagoyama. These works were structured by the case studies done by the authors and the informations were collected through journals (“tsuzurikata”) and interview records with local people.

The importance of studying CASE is evidenced by its impact on government's attitude in the field of health and welfare policy. The investigation record of Morinaga's contaminated milk case that victimized many babies, and a private note (diary) by a victim's family who infected with HIV posed a serious question to the government in the related policy area.

CASE study brings us enriched hypothesis and an insight into different socio-cultural factors as a background of each CASE as well. The term “HOPPOU” will finally gain another significance, away from its usages a historical term through the study here.

Key words : “HOPPOU (northern regions)”, interview record, journal (“tsuzurikata”), case, CASE (=typical case)